

「考えさせられる」 葬儀

(十五)

葬儀の現状と未来を考える

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、葬送儀礼やお墓に関する調査・分析を続け、その成果について『宗報』に報告してきました。二〇二〇年以降は、新型コロナウイルス感染症が世界にまん延し、葬送儀礼をはじめとする寺院活動の課題を浮き彫りにするなど、大きな影響がでています。そこで、社会を揺るがす非常時における葬送儀礼を考えていくために、五回に亘って新型コロナウイルス感染症と葬儀の変化について報告いたしました(二〇二〇年八月号「考えさせられる」葬儀(九)、二〇二〇年十一月・十二月合併号「同」(十)・(十一)、二〇二一年三月号「同」(十三)、二〇二一年十月号「同」(十四))。

世界中で新型コロナウイルス感染症が拡大し始めてから、すでに二年以上が経過し、日本でもワクチン接種が急速に進めら

れましたが、二〇二一年八月二十七日には、二十一の都道府県に緊急事態宣言、十二県にまん延防止等重点措置が発令(追加地域も含む)されるなど、感染拡大に歯止めがかからない状況になりました。こうした中、宗教界、特に仏教界は新型コロナウイルス感染症がもたらした様々な課題にどのように対応していくべきか。あるいは、「仏事」をはじめとする「宗教行為／宗教行事」を「新しい生活様式」に即してどのように行っていくべきかについて、明確に示すまでには至ってはいません。それほど、事態は混迷しているとも言えるのですが、事態の推移をただ見守り続けていくことも避けなければならないと言えます。

そこで、この度は、「仏教に関する実態把握調査(二〇二〇

年度「臨時調査」報告書「新型コロナウイルス感染症が仏教寺院に与える影響」など、各種調査を行われている公益財団法人全日本仏教会の理事長である戸松義晴氏を招聘し、「仏教に関する世論調査から何を学び何をすべきか―門徒・檀信徒から期待される任職像―」をテーマに、現代において寺院・僧侶にはどのようなことが求められているのか。あるいは、寺院・僧侶が考えなければならないことは何か、について議論を行いました。

一、近年の葬儀事情

戸松氏は、最初に、全日本仏教会が行った調査結果に加え、政府や一般財団法人が行った各種調査の結果、全日本仏教会主催の講演会資料などから、近年の葬儀事情として、

- ・ 信仰、祭祀費支出の減少
- ・ 戒名、法名に対する意識の変化（不要論の高まり）
- ・ 一般社会では、「費用をかけない葬儀」「形式・しきたりにこだわらない葬儀」「個人・家族の思いを重視した葬儀」が望まれている

といった点に特徴があると述べられました。これらの特徴すべてが「支出・費用」に関わっていることからわかるように、戸松氏が強調したことの一つは、「葬送儀礼に関わる経済的側面」は現代において避けられない課題であるということです。中で

も戒名については、全日本仏教会主催で開催したシンポジウムで提示された「七二・二％が戒名不要と答え、葬儀をやるべきと答えた人でも五八・九％は戒名不要とした」という大和総研の調査結果（全日本仏教会主催「葬儀は誰の為にを行うのか？」シンポジウム記録集〈平成二十五年四月発行〉石田佳宏大和総研主任研究員講演「最近の葬儀事情」や、読売新聞が実施した「冠婚葬祭に関する全国世論調査」にもとづき「戒名『必要ない』五六％」と報道された（二〇一二年四月七日）ことなどを紹介されながら、「なぜ戒名や法名が必要なのか」、また「戒名や法名に支出が必要なのか」といった点に対する説明責任が強く求められていると述べられました。

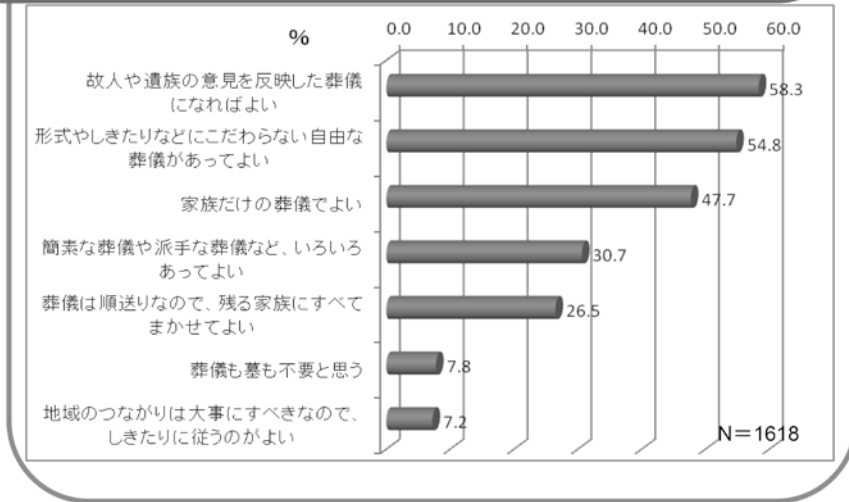
二、一般社会と寺院・僧侶とのズレ

葬送儀礼に対する一般社会の意識は、社会状況にあわせて変化してきたと考えられます。なぜなら、葬送儀礼を含む仏事全般、あるいは宗教行事などが、経済的な視点から見直されるということそのものが、宗教・仏教も「資本主義経済」という観点とは切り離せない状況にあることを意味するからです。

そうした状況において、一般社会の意識・認識と宗教・仏教（あるいは、寺院・僧侶）の意識・認識との間にズレが生じることは避けがたいはずです。戸松氏は、そうしたズレについて、浄土宗総合研究所における研究成果からいくつか紹介されまし

資料1

今後の葬儀のあり方



(一財)日本消費者協会「葬儀の必要性について—第10回消費者アンケートから考える」

た。

例えば、「門信徒・檀信徒」について、寺院・僧侶側は「寺院護持のための役割を持つもの」という認識であるのに対し、一般社会では「墓の管理と法事をはじめとする仏事のサービスを受けるもの」と認識しているというズレがある。「墓・墓地の承継」について、寺院・僧侶側は「墓の承継は後継者の役目であり、寺檀関係を持つことが当たり前」という認識であるのに対し、一般社会では「墓・墓地によって寺院・僧侶とのつきあいをしなければならない」と認識しているというズレがある。また、浄土宗総合研究所で二〇〇五年に実施した「お葬式に関するアンケート調査」では、「残された遺族の心を慰める」と答えた割合が、寺院一九%に対して檀信徒は1%という結果が出ている。

こうしたズレを強調する戸松氏は、浄土真宗本願寺派の伝灯奉告法要におけるインタビュー調査(二〇一七年)において、「具体的にどのようなことに心を打たれたか」という設問に対し、「法話」と答えた方が1%であったという結果と、加えて、本願寺派からこの調査結果が公表されたことに注目されました。なぜなら、伝道教団である本願寺派の調査において、「法話に心を打たれた」人が1%だったという結果そのものが、一般社会と寺院・僧侶側とのズレをあらわしており、この結果を受け止めることから、一般社会と寺院・僧侶との関係を構築していかなければならないからです。

資料2 「全日仏アンケート」

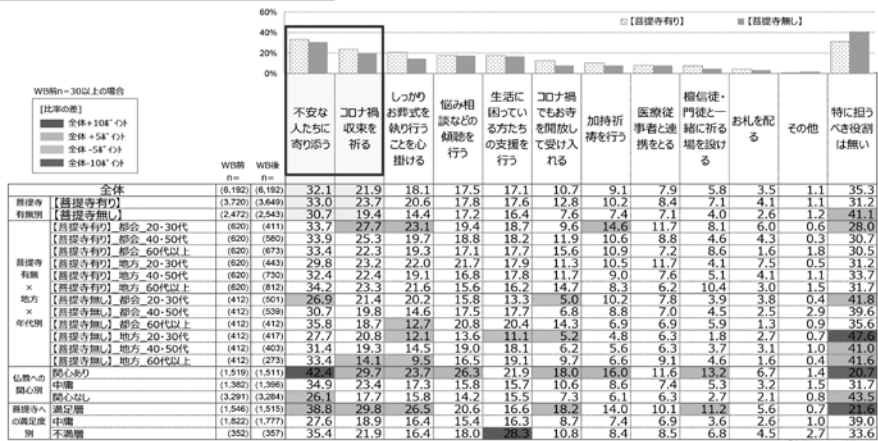
7-①. 今後、寺院・僧侶に求める役割



コロナ禍において寺院・僧侶に求められる役割は「不安な人たちに寄り添う」「コロナ禍収束を祈る」が上位。

- 通常の調査では「特になし」の項目が高く示されることが多いが、「特になし」の回答比率が3割台と低い。
- 今回のコロナ禍においては「寄り添う」、「祈る」が強くなってきていることが特徴的であり、それだけ寺院・僧侶に対しての期待は大きいと考えられる。
- 「菩提寺の有無」や「仏教への関心の有無」に関わらず、コロナ禍において僧侶への期待は高く表れている。

コロナ禍において寺院・僧侶はどのような役割を担うべきか (Q29)



こうしたことを前提とし、戸松氏は、例えば「形式・しきたりにこだわらない葬儀」「故人・家族の思いを重視した葬儀」が求められたとき(資料1)、寺院・僧侶の側において、門信徒・檀信徒の「希望や思い」、そしてどんな葬儀を行うのかという「自由」を認めながら、しかも各宗派が伝統的にもっている形式を保持していくことのバランスをどのようにとっていくべきなのかという難問が、寺院・僧侶に突きつけられていると述べられました。

三、「役に立つ」という視点

一般社会と寺院・僧侶とのズレを見据えたうえで、今後どのような寺院や僧侶であるべきかと考えた際、戸松氏が提示されたのが「役に立つお寺に」という言葉です。

「役に立つ」という言葉は、有用性や有益性だけで寺院や僧侶を判断してしまおう。あるいは、役に立たなければ寺院・僧侶は必要ない、といった意味に理解されやすい言葉ですが、戸松氏の意図はそうではありません。例えば、戸松氏は、全日本仏教会が新型コロナウイルス感染症の流行をうけて行った「仏教に関する実態把握調査(二〇二〇年度臨時調査)報告書」(資料2)において、寺院・僧侶に求められている役割の第一が「不安な人たちに寄り添う」であったこと、「コロナ禍の収束を祈る」が上位にあがったことや、NHK放送文化研究所による「第

九回 日本人の意識調査(二〇一三)では、多くの人が「墓参り」「お守り」「祈願」といったことを重要視しているという結果に注目されています。つまり、戸松氏が大切にすることは、門信徒や檀信徒が寺院・僧侶に求めることに対応する必要があるということであり、しかも、その「求める」ことが現代においては各個人において多様化しているということです。加えて、戸松氏は、仏教が大切にする「智慧・慈悲」の中でも「慈悲」は具体的な行動に、「思い」だけでなく「形」へと展開されなければならぬとも強調されました。

つまり、戸松氏が「役に立つ」と表現されたことは、多様化する個人の価値観、各個人のそれぞれの思いを大切に受け止める、新しい関係性・つながりを構築していこうとすることを意味しています。このことを葬送儀礼にあてはめ、戸松氏は、葬送儀礼を行っていくには、故人や遺族が「どのような思いで死を迎えているのか。遺族はかけがえない大事な人の死をどのように受け止めているのか」といったことを汲み取っていく傾聴の姿勢にもとづき、門信徒・檀信徒一人ひとりと「オーダーメイドの関係」が構築されていく必要があると述べられました。

四、これからの寺院・僧侶

「役に立つ」という視点を取り入れながら、これからの寺院・

僧侶を考えるに際して、必要なことは何か。これに対して、戸松氏が「仏教界全体の課題」として提示され、特に強調されたのが「女性の視点・意見」を取り入れる必要性です。このことは、超高齢社会における日本において、男性に比して女性の高齢化率のほうが高いという人口動態とも関連しています。つまり、現代では「終活」という言葉で葬送儀礼や墓を含む死後の準備をする必要性が主張されていますが、このとき、例えば各家庭における女性の意思決定が強く反映される場面が多いと予想されます。そうした現状を踏まえれば、寺院・僧侶にとって女性の視点・意見をいかに汲み取り、反映させていくかということは重要な課題となります。

この点に加え、もう一点指摘されたのが、「連携」の必要性です。戸松氏が先に指摘された「オーダーメイドの関係」が構築されたとしても、あらゆる悩みや相談に寺院・僧侶が関われるとは限りません。特に、超高齢社会において「死」と関わる寺院・僧侶にとつて、死にゆく人やその家族・親族の悲嘆に関わることに関わっていくかは難題です。そうしたとき、寺院・僧侶だけでなく、医師・看護師などの医療従事者をはじめとして、様々な人びとと関わり合いながら「オーダーメイドの関係」を構築していく必要があります。こうしたことから、戸松氏は、本願寺派における「ビハラー」「本願寺医師の会」といった活動は非常に重要な活動であり、注目すべきであると述べられました。

五、まとめにかえて

戸松氏の種々の提言は、多様な調査報告を分析したうえでなされました。寺院を護持し、僧侶を支えてきた人びとの高齢化と急激な減少、一般社会の宗教・仏教に対する見方の変化などは、これまでにあった「寺院・僧侶と門信徒・檀信徒の関係」を大きく変化させています。このことを、戸松氏は「現代において、寺院は信仰共同体として存在しているのか」という厳しい問いかけで指摘されました。こうした指摘は、もちろん戸松氏だけがしているわけではありませんが、全日本仏教会理事長という立場からなされたものと理解したとき、戸松氏の提言は、日本のあらゆる寺院・僧侶に向けられたものだと思われ受け取らなければなりません。

そのうえで、葬送儀礼を含め、寺院・僧侶の活動を考える際に重要となるのは、「信頼」という言葉ではないでしょうか。医療分野にも造詣が深い戸松氏は、「医療行為は医師への信頼がないと成り立たない。それは、嘘をつかない、医療に対する確かな知識がある、といったことに支えられている。では、一般社会から寺院・僧侶が信頼されるには何が必要であるか」と問いかけられました。「寺院・僧侶の信頼」ととって大切なことは、み教えに対する知識であり、確かな儀礼作法が求められることは間違いありません。そのうえで、戸松氏の提言を受け

止めるなら、「今まさに悩み、苦しみ、困っている人ひとりひとりに、心をこめて誠実な態度で接し、寄り添い、話を聞く」といった具体的な行動が求められていると言えると思います。

新型コロナウイルス感染症が拡大し二年以上が経過する中で、多くの方々が様々な理由で亡くなり、葬送儀礼が執行されています。また、移動が制限される中で、お盆やお彼岸での帰省もできず、お墓参りができずにいる人がいます。新型コロナウイルス感染症が収束したら、もとの生活に戻れたら、と考えるだけでなく、これまで何ができたのか、できなかったのか。今の生活の中で何ができるのか。何をしていけばいいのか。このことを、問い直していき、少しでも具体的な行動へと移していく必要があるように思います。

(報告者 岡崎秀磨・富島信海)

【講師紹介】戸松義晴(とまつ・よしはる)

一九五三年生まれ。慶応義塾大学文学部卒業、ハーバード大学大学院神学校修士課程修了。心光院(東京都港区)住職。浄土宗総合研究所主任研究員。世界仏教徒連盟(WFB)執行役員。二〇二〇年六月に全日本仏教会理事長に就任。